

沖縄「慰霊の日」戦争許さない努力を今こそ！

今日23日、沖縄は69回目の「慰霊の日」を迎えます。1945年、太平洋戦争末期の沖縄戦で日本軍の組織的な抵抗が終わった日とされます。沖縄県は、「戦争による惨禍が再び起こることのないよう」と決意し、「慰霊の日」を定めました。沖縄戦最後の激戦地、摩文仁（まぶに）の丘にある平和記念公園では追悼式が開かれ、安倍晋三首相も出席します。集団的自衛権の行使容認で日本を「戦争する国」にしようとしている首相が、24万人を超える犠牲者名が刻銘された「平和の礎（いしじ）」や県民を前に何を語るのでしょうか。

公園の一角にある平和記念資料館の展示室の壁には、次のような「ことば」が書かれています。

「沖縄戦の実相にふれるたびに／戦争というものは／これほど残忍で これほど汚辱にまみれたものはない／と思うのです」「戦後このかた 私たちは／あらゆる戦争を憎み／平和な島を建設せねばと思いつけてきました／これが／あまりにも大きすぎた代償を払って得た／ゆずることのできない／私たちの信条なのです」

県民の4人に1人が犠牲になった沖縄戦の凄惨（せいさん）な体験から、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、文化をこよなく愛する”沖縄の心”は生まれました。それは、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意」した日本国憲法にも体现されています。ー以下略ー

これは6月23日付けの、新聞赤旗の主張です。6月23日という日は、日本で唯一の地上戦となった沖縄戦が終結した日なのです。私たちは、この日の持つ意義を忘れてはならないと思います。この1日前の6月22日に通常国会が閉幕しました。翌日の北海道新聞に次のような記事が掲載されています。

「言論の府」の再生急げ

国の行方を左右する大きな政治課題が多かった。にもかかわらず、国会の論戦が盛り上がった場面がほとんどなかった。安倍政権には批判を顧みない独走が目立つ。これを許せば国会の存在意義が問われる。与野党を超え「言論の府」としての責任を再認識してもらいたい。

集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈変更をめぐり、安倍首相の国会軽視は目に余る。首相が自らの考えを説明したのは訪問先の外国、次に与党という順で、国会にはいまだに公式な説明がない。堅持し続けてきた平和主義をなぜ突き崩すのか。なぜ戦闘地域に自衛隊を派遣しなければならないのか。首相の真意を知りたい。その要請に国会は応えていない。閉会後も集中審議を行うべきだ。最後に平和記念資料館の「ことば」をもう一つ紹介します。

「戦争をおこすのはたしかに人間です／しかしそれ以上に／戦争を許さない努力のできるのも／私たち人間ではないでしょうか」